

愛媛県宇和島市における傾斜地柑橘栽培の現状と課題 Current situation and issues of slope citrus farm in Uwajima City, Ehime Prefecture

○安瀬地 一作*

Azechi Issaku

1. はじめに

1865年に吉田町立間地区に植え付けられた55本の苗木から始まったといわれる愛媛みかん。子供のころにみていた景色は雑木林が目立つようになってきた。2023年にも高齢のためリタイアした畑のスプリンクラー施設を撤去したところである。この畑も数年もすればすっかり雑木林になってしまうのだろう。耕作面積は徐々に減少している。その現状と課題を著者なりの目線で報告したいと思う。

2. 愛媛県宇和島市の段畑とみかん栽培の歴史

愛媛県のみかんと聞くと段畑を連想するのではないだろうか。まずは段畑とみかんの歴史について紹介する。段畑とみかん栽培の歴史については愛媛県史に詳しい。以下、愛媛県史を要約する。

段畑の形成時期は江戸時代初期、幕末から明治、第二次大戦後の三つの時期だといわれている。江戸時代初期にいわし網漁業民の食糧自給のために集落背後の傾斜地が開かれ、その後幕末から明治にかけて漁業の発展にともない人口が増加したことで急激に開発が進み、大戦後の食糧不足により更なる段畑の開発が進んだといわれている。段畑の形成時期は地域的に異なっており、宇和島市以南の南予地域ではいしの棲息密度が高く獣害が著しかったことから開発が遅れたが、江戸時代末期頃にいのししが減少したことと甘藷が導入されたことなどもあって飛躍的に開発が進んだ。段畑の商品作物は江戸～明治では榎（はぜ）であったが、明治中期以降には榎に代わって桑園が増加している。この時期のみかん栽培はその栽培技術が確立しないままに拡大していったため不良園地が続出したことに加え1917年～1918年の寒害により大きなダメージを負っている。その後昭和10年代に繭の価格の暴落と戦争の激化に伴う食糧増産のため甘藷や麦の普通畑に転換されていくが、徐々にみかん園が増え始め、昭和30年代のみかんブームの到来によりみかん栽培が盛んになってくる。みかん栽培に利用された土地は、15度から25度の傾斜地の利用率が特に高いが、25度以上の傾斜地利用も進んでおり、特に吉田地区は25度以上の傾斜地が68%を占めている。また、この頃には標高300mの山頂付近まで余すところなく徹底的に開発利用されたため町内には可耕未開墾地はほとんどなくなってしまいみかん適地をもとめて町外への出作りが盛んに行われた。遠くは大分・宮崎県にまで進出している。しかし、好況を誇ったみかん栽培であるが、生産量の増大による価格の暴落により昭和40年代から曲がり角にさしかかりみかん栽培から撤退する地区もみられるようになった。

以上が愛媛県史誌に記載されている段畑とみかん栽培の歴史の概要である。

3. 現状と課題

3-1. 耕作放棄地と獣害

昭和40年代から曲がり角にさしかかったみかん栽培は、しばらく曲がったままの状態が続き、1973年には60万tあった生産量も2020年には11万tにまで減少した。現在でも高齢により離農する農家が相次いでいる。生産量が減少したことによりみかんの価格はやや盛り返してきたが、耕作放棄地の問題が徐々に大きくなってきている。作り手のいなくなった園地のうち傾斜が緩く優良な園地は規模拡大を図る担い手農家や好条件の園地を求める農家に引き継がれるが、傾斜の急な条件不利地は放棄されてしまう。この

*柑橘農家 (Citrus farmer)

キーワード：傾斜地、みかん栽培、耕作放棄地、獣害、適地適作

放棄地に隣接する園地では、雑木の繁茂による日当たりの悪化や蔓植物などの侵入防止の対策などの作業が増えることとなる。また、耕作放棄地はイノシシなどの野生動物の棲み処となるため、放棄地の増加は獣害が増加を意味する。実際、イノシシによる被害が年々増加しており、収穫適期を迎えた果実のほとんどをイノシシによる食害で失う園地が多発している。イノシシによる被害は食害だけでなく、石垣の破壊やみかんの幼木の抜根、マダニの媒介など様々であるため、被害が多発する地区では傾斜が緩く優良な場所であっても放棄される園地が増えてきており、早急な対策が必要である。

3-2. 傾斜地農業

2章にあるように、段畑の発達とみかん栽培の発達により、現在でも宇和島市吉田町は県内有数のみかん産地であるが、著者の住む地区のみかん山は思いのほか段畑が少ない。その理由として急すぎる傾斜があげられる。作業効率をよくするための段畑であるが、傾斜も急になりすぎると段が高くなり耕作面がほとんどとれないために作業性も悪くなおかつ植樹本数が極めて少なくなってしまうために、あえて段畑の形態をとらなかつたものと思われる。統計をとったわけではないので正確ではないが、45度以上の傾斜地では段畑の形態はとらず斜面のまま利用している印象である。著者の園地では45度程度の段畑とそのままの傾斜地の両方の園地があるが、(あくまでも著者の感想であるが)それぞれ以下の特徴がある。段畑は、耕作面は水平なため作業労力は小さいが段高が高く上下の異動が難しいことに加え耕作面が狭いために樹が大きくなると水平の移動も難しくなる。また、段畑は一度崩れてしまうと復旧が用意ではない。土嚢を積んで修復している園地も一部あるが、ほとんどの園地では崩壊したままとなっている。これに対して傾斜園地では移動も植樹場所も自由であるが、傾斜がきついためにより作業労力は大きくなる。しかし、30cm程度の幅の歩く道をつけさえすれば作業労力を格段に小さくすることができるため、それほど作業性は悪くはない(個人的には傾斜地のほうが好みであるが、年を重ねて体力が落ちてくると段畑のほうがよくなるかもしれない)。傾斜地で一番注意が必要なのは、収穫したみかんの置き場が難しいため油断するとすべてが転がってしまうはめになることである。

3-3. 適地適作

愛媛県宇和島市吉田町は山地が非常に入り組んでおり複雑な地形をしている。そのため、ひとつの園地であっても数十メートル離れると日当たりの違いや風通しの違い、地下水脈の有無など環境条件がまったく異なり、それに伴って土質や土壌条件も違うようである。このような複雑な地形では大規模化は難しく、一般的には不利な条件であるが、毎年のように新しい品種が開発され現在では数えきれないほどの品種が栽培されている柑橘農業では有利に働く。例えば、温州みかんやポンカンなどは水はけがよい場所で高品質のものができる種類もあれば、甘平のように常に水が必要な品種もあるように、品種ごとに適切な条件が異なっているため、複雑な地形をもつ吉田町では多種多様な品種を高品質で栽培することが可能なのである。また、複雑な地形で一様な環境条件の園地がほとんどないということは、極端気象現象によって全園が被害を受けることがないということの意味しており、安定した経営が期待できる。“多様性”は柑橘栽培においても重要なテーマである。しかし、毎年のように開発される多くの品種では適地の情報がほとんどなく、試行錯誤によって見つけているのが現状である。可能であれば開発段階で適地の情報が欲しいところである。

4. おわりに

昭和30年代に本格的に始まった柑橘栽培、その歴史はそれほど長くない。そのうえ、毎年のように新しい品種が誕生している。そのためか、まだまだ試行錯誤の面が多いように思う。研究対象としての柑橘栽培の歴史はもっと短い。まだまだ発展途上(もしかしたら未開の地?)なのではないだろうか。これから、研究が進み様々な発見が得られることを期待した。